支援をつなぐ

発　表　者　石橋美咲子（認定こども園あけぼの幼稚園）
山本和美（認定こども園あけぼの幼稚園
特別支援コーディネーター）
指導助言者　松本理恵（鳥取県立米子養護学校
特別支援教育コーディネーター）
司　会　者　倉田愛香（認定こども園あけぼの幼稚園）
記　録　者　森上聡美（認定こども園あけぼの幼稚園）

１．　発表の概要

（１）主題設定の理由

子ども達は、はじめての集団生活の場で様々な体験をし、大人や子ども同士の関わりの中から心も身体も大きく成長する。子ども達はそれぞれに違う個性をもち、自分なりの感じ方がある。

その中で私達は、たくさんの子ども達と接してきた経験から“言葉が出にくい子”“理解する事が難しい子”“集団生活に適応するのが苦手な子”“コミュニケーションがとれない子”等といった子ども達に気づき、向き合い悩みながら子ども達と関わっている。その際、どのように保護者とその思いを共有すべきか常に迷っている。子どもの発達に対する保護者の受け止め方は、様々であり、発達が気になる子どもの保護者への伝え方に日々悩んでいる。本園では第一に保護者との信頼関係を深めていき、次に園内支援委員会を設け、子どもの発達について話し合う。その結果、保護者に伝える機会を設け、保護者の気持ちを配慮しながら子どもの成長・発達に繋がるように日々努力している。この研究を行う中で、今まで行ってきた支援をつなぐ方法を再検討し、特別支援教育について考えていく為の研究のテーマとした。

（２）取り組みについて

本園では、支援を必要とする子が複数在籍し、担任や加配保育教諭が保護者と連携を取りながら日々の保育にあたっている。園内での個別相談も設けており、保護者と子どもの成長を喜び合いながら課題を確認し園と家庭と同じ支援ができるような工夫も行っている。また、日々連絡ノートをやりとりする中で、保護者が感じている様々な悩みや担任が感じている成長の変化を“つなぎ”その子をとりまく環境を整えられるよう努力している。その中でも日々出てくる課題や悩みを感じながら、周りの保育教諭と一緒に“支援”しているところである。

（３）実践例

【小集団活動について】

本園では、小集団活動を“仲良しタイム”と呼んでいる。仲良しタイムを始めてから今年で８年目を迎える。参加している子ども達は医療受診を行い診断名がある。参加する事にあたっては保護者の方から了解を得ている。時には診断名がなくても担任や副担任から相談があり、必要と思われるお子さんの場合は参加する事もある。

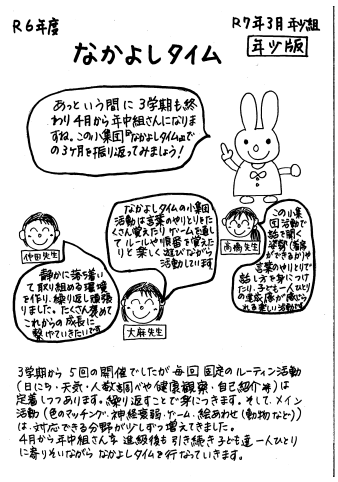
活動内容については、年長児と年中児は月２回、１回１時間程度を不定期で行っている。年少児は

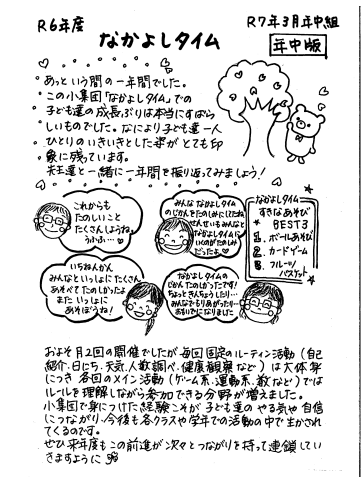
４月からの様子を見て、始める時期と活動時間を検討している。参加が難しい場合は個別で課題を行う事もある。活動には必ず加配保育教諭が同席し、毎月２回目の仲良しタイムには色々なご褒美をもらう。

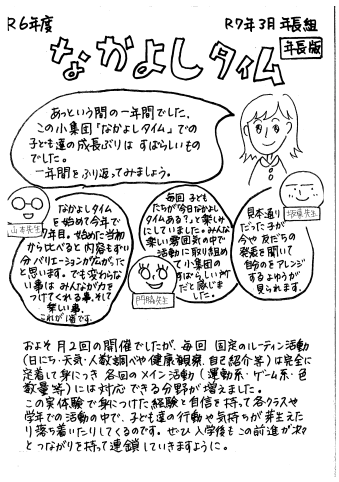
活動内容はルーティーンで行う“あいさつ・自己紹介・日にち調べ・天気調べ・人数かぞえ・健康観察”等。これらに加えて毎回、色々な課題をしている。例えば“聞き取り・質問に対して答える比較、マッチング、カードゲーム、宝探し、買い物ごっこ”等。年長児は就学も意識して行っている。それにより小学校の支援級の体験を行った際、発揮できる力も備っている。身体を動かす遊びでは、相手を意識したり仲間と協力したりする“キャッチボール、野球、キックベース、風船バレー、バトミントン、ボウリング、リレー、集団遊び”等している。

小集団活動のメリットとしては、継続して行う事でスモールステップではあるが、成長が見られる。成長内容としては、人間関係やコミュニケーション力が育ってきている。課題に向き合う意欲が向上し、社会性の発達にも繋がっている。また、自己肯定感も育つという様々なメリットがある。具体的には、月２回、１回１時間程度でも友だちとの関りを通して協力する楽しさを感じる事ができている。お互いの意見を尊重し話し合う力を養ったり、集団のルールや決まりを守る経験を積む事ができる。最後に一人ひとりの特性に応じ、発達の課題に合った指導ができるようにしていく事が大切と感じている。

※該当児の保護者には活動内容と活動目標を直接伝え、「仲良しタイムだより」も配布している。







（３） 反省と考察

現在、あけぼの幼稚園には、特別支援コーディネーターの山本が、困り感のあるお子さんの為に連携機関を把握している事で保護者の困り感や悩みを聞いた時に、ケースバイケースで受け答えがほぼできる。(医療関係・児童発達支援関係・児相・市役所等)。保護者の方から質問された内容について、その場で答えられる環境は保護者の方にとって、とても安心である。

この研究を通して、集団の中でみんなが不安のない支援を行い、うまくいった支援をつなぐことの大切さを改めて感じることができた。

又、A児の就学後の様子も聞く事もできている。研究発表が終わっても引き続き、A児の様子を見に、学校へ行かせて頂き、どのような成長をしているのかを見る事によって今後の支援の参考になるので、卒園がゴールではなく就学後もつながっている事の大切さを感じている。

（４） 今後の課題

日々、新しくなる情報を得ながら、いかに早期から支援をして連携をとり、その情報も確実に伝えていくのかを考え工夫し続けることは、課題である。周りの先生と一緒に悩み考えていきながら、み

んなで考えていくことで、どの先生でも同じ温度で問題に向き合え、その問題を解決していった過程を記録し、次の担任へ引き継ぐことの大切を感じた。

米子市の意向もあり年中組（４歳児）の段階で就学に向け小学校見学を行うことにより、保護者に１年間かけて就学についてゆっくり考えて頂くことができる様になった。また、小学校の校長先生方に年中組の段階でその子を知ってもらう事により、早めに連携がとれるようになってきた。場合によっては、その子の様子を見に来てもらうことで、その子の実態を理解して頂けるので、スムーズな小学校生活が送れるようになったと感じる。

２．研究討議

（１） 発表に対する質疑応答

Q…診断がついている子の特性が薄くなったり、診断名が変わったりする事はありますか？

A…半年～１年経ったら診断名が変わる可能性もあります。児童発達支援で伸びる事はよくあります。

（２） 全体討議

赤グループ

✿パニックが起きた時の関わり方（２歳児）

→何が原因なのかを考えてその時の環境、言葉かけ等で対応していく。広い部屋に１人、声かけをせずにそっと見守ったり囲いをしたりして、落ち着いてから次の活動へ移す。

✿自閉症の子どもとの関わりで何か良いかかわり方はないか？

→同じ空間で先生が別の遊びをして傍によって来たらいい。無理にその子の世界に入っていかず、その子がしている事と同じようにする事で心地良さを感じる。その空間に一緒に居るだけで、みんなを感じる事ができる。

✿発達が気になる子に対して、どこから支援が必要なのか？となる見極めが難しい。

→保護者同士をつなぐ事で、孤独感がなくなる事もあった。まずは、家庭との連携が大切。

✿保護者としては、行事など他児と一緒に参加をさせたいという思いがある。

→支援が必要な子も、参加できる部分だけ参加できるようにする。

黄グループ

✿発達の差があるクラスで、活動の進め方に悩んでいる。

→行事の時にはどちらの子に合わせて進めていくのがいいのか、レベルを少し下げて出来る子は目立つ場面をつくってあげる。難しい子はその子に合わせてチームに分かれて活動をする。

✿達障害か愛着障害か分からない。

→職員間では愛着障害と思っていたが、病院受診後の診断で発達の診断名が付いた。子どもの様子がよくわかっていないのに‥と思う事がある。愛着のアプローチが難しく、保護者の方が心を閉ざされる事もある。保護者とのコミュニケーションをしっかりとる事で信頼関係を築いていく事が必要である。

青グループ

✿発達が気になる子の保護者へのアプローチの仕方が分からない。

→鳥取県東部、中部、西部で違いがある。保護者の了解が無いと健診に繋げていけない地域、保護

者の了解が無くても繋げられる地域、地域差があるのでそれぞれの地域になった合った支援をしていかなければならない。

✿保護者に子どもの姿を具体的に、ポジティブに伝える。
→時間がかかるがマイナス面ばかり伝えると保護者が避けるようになってしまうので、まずはポジティブな部分を伝える。また、１対１で担任と保護者だけで話すと行き詰ってしまうので、主任の先生等が保護者と担任の間に入ってソフトな空間をつくってもらうと話が上手く進む事もある。

✿入園前に園と家庭で子どもの様子を把握して、支援に繋げていく。
→例えば、一日入園の時に既に診断名が付いている子がおられたら、しっかりと様子を聞いて入園後の支援に繋げていく事が大事である。

緑グループ

✿職員間での支援方法の伝え方、やり方等、先生によって差が出ているところが悩み。
→困った時に相談ができる存在が居ると強味である。職員間でなかなか話し合い等の時間がとれないが、現状の悩みや情報交換をする時間をつくれると良いと思う。

✿診断名が付いてない子の保護者への伝え方、専門機関へのつなげ方が分からない。
→就学を考えると早めに行動したい。保護者も学校についてイメージしてもらえると話がしやすい。また、専門機関の先生からアプローチしてもらえると心強い。専門機関や就学に関する事について、担任が全部請け負って保護者に伝える事は負担に感じる。担任だけ、加配だけでなく園全体で協力していく事が大事だと思う。

３．指導助言

Ａ児の現在の様子

食事、着替え等身の回りの事は、自分で行う事ができるようになっている。着替えは一人で他クラスに移動して行い、着替後はまた自分のクラスに戻る事ができる。音楽では、学習の流れがパターンとして身につき、率先して歌を歌ったりして友だちを引っ張っている。

どこに「つなぐ」のか？

目指すのは、自立と社会参加。特別支援教育の充実は、インクルーシブ教育の推進につながる。
合理的配慮について、加配を付けたから良しではない。組織として、担任の「こうしたい」という思いを大切にして、加配職員と相談して支援を進めていく事が大切。担任だけが大変な思いをするのではなく、園として組織として取り組んでいく。今ある環境、今ある人員、一人ひとりの特性に応じ、発達の課題に即した指導や支援を行っていく。普段、先生方がされている事を自信をもって続けていく事。
「この支援でいいのかな？」と不安に感じておられる先生方が多いが、「これでいいだろう」より、「これでいいのかな？」と悩む事が大事。
子ども自身が「この支援グッズがあれば、みんなと一緒に活動できる」と理解する事が大事。「これがあれば安心して過ごせる」と本人が周りに発信できるようになる姿を目指したい。